

高等教育における人間学的な韓国語教育の
概念構築の試み

A Humanistic Approach to Korean Language Teaching
in Higher Education

岡田靖子 澤海崇文 いとうたけひこ

OKADA Yasuko, SAWAUMI Takafumi, ITO Takehiko

高等教育における人間学的な韓国語教育の 概念構築の試み

A Humanistic Approach to Korean Language Teaching in Higher Education

岡田靖子 澤海崇文^a いとうたけひこ^b

OKADA Yasuko, SAWAUMI Takafumi, ITO Takehiko

要旨：本稿の目的は、日本人学習者を対象とした韓国語教育において、人間学理論を中心とした言語教育の可能性を提案することである。まず、言語を学ぶことの意義や言語を学ぶ過程で生じる学習者の内発的動機づけに注目する。マズローが提唱した動機づけの基本的欲求の階層の仮説に基づき、人間学を中心とした言語教育の理想がどのようなものであるかについて英語教育から具体例をあげる。つづいて、国内において韓国語ブームが訪れた経緯を概観し、国内外における外国語としての韓国語教育の研究を紹介する。最後に、学習者による自己の確立を目指した韓国語授業での指導例を示し、今後の韓国語教育で留意すべき視点を明らかにする。

キーワード：日本人学習者、韓国語教育、人間学理論、外国語としての韓国語

1. はじめに

日本では国際的共通語として英語が注目される一方、近年、韓国語への人気が高まりつつある。第二次世界大戦後に日本の中学校・高等学校で再開されてから70年以上になる英語教育とは異なり¹、日本人が韓国語学習に興味を持ち始めたのは、まだ記憶に新しい。1980年代にはNHKの語学講座やソウルオリンピックなどがきっかけとなり、韓国に関する情報が国内でも容易に入手できるようになった。2000年代に入ると『冬のソナタ』などの韓国ドラマが国内で放送され、韓国

a 流通経済大学

b 和光大学

に対する関心が急速に高まり、いわゆる「韓流ブーム」が巻き起こった。

韓国の大衆文化への理解を深めるために、国内では韓国語学習を始める若者が増えてきている。以前、女子学生が「英語は得意じゃないけれど、韓国語を勉強するのは好きだ」と話しているのを第一著者は耳にし、もしかしたら英語が得意ではない学生にとって英語以外の言語を学ぶことが、学習者の人間としての個を確立させるきっかけになるのではと考えた。

本稿では、まず言語教育の目的を明らかにしたうえで日本における韓国語教育の動向に着目する。つづいて、国内外において外国語としての韓国語教育の動向を探る。人間学を中心とした教育を韓国語教育で実践するための理論を概観し、その教育理論を韓国語教育で実践するための方向性について検討する。

2. 言語教育とは

2.1 言語教育の目的

言語教育の目的は、まず言語運用能力を育成することである。この言語運用能力は、聞く力、読む力、会話力、表現力、書く力を含む²。国内の小学校では2020年から英語科目が必須化される。文部科学省の学習指導要領によると、中学年における外国語活動では（1）聞くこと、（2）話すこと（やりとり）、（3）話すこと（発表）の3領域、高学年の英語科目では前述の3領域のほかに（4）読むこと、（5）書くことを加えた5領域ごとに達成すべき目標が設定されている³。同様に、中等教育や高等教育でも前述の5つの領域ごとに言語活動をとおして、学習者が英語でコミュニケーションを図る資質・能力の育成を目指す。このように、国内での英語教育は、言語運用能力の育成を中心とした教育が考えられている。

言語運用能力のスキル以外に言語教育で育まれるのが人間形成である。加賀田は、英語教育において単に言語習得を目的とするのではなく、我々人間の存在を多角的に捉え、人間理解を促進するための教育を目指し、これを「人間学的英語教育」と称している⁴。言語教育は学習者の個の確立にも貢献する。したがって、英語授業への参加が学習者の行動や考え方に多かれ少なかれ影響を与えていると考えられる。このような考え方は、人間学的外国語教育のそれと類似している。人間学的な教育とは、カリキュラムをとおして科目と個人の成長空間を統合させることであり、学習過程において常に感情が見いだされなければならないし、新しい情報が得られなければならない⁵。学習者が自己発見や内省、自尊心を関連付けたり、自己や他者の長所を見つけたりすることがあげられる。人間の自己成長を目指した言語教育は、学習者が楽しさを感じながら実

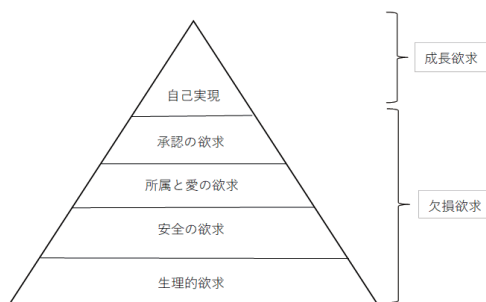
践されるべきだと思われる。

国内においても、このような人間学を中心とした言語教育の実現を支持する研究者も存在する⁶。英語教育では「目標言語によって自己を語り、他者を知るというコミュニケーション能力の獲得（言語面の目的）と、個の確立または自己実現（教育的側面の目的）の統合」が目的として掲げられているが⁷、これまでの英語授業を振り返ると、言語スキルの獲得を強調する一方で、自己の独自性の発見や他者との対話などの個の確立が見過ごされてきた節がある。そこで、これからの言語教育では、学習者の自己を成長させるための教育的側面にも着目しながら言語スキルを指導する必要性が考えられる。

2.2 言語教育における内発的動機づけ

学習者による個の確立を達成させるためには、どのような前提が必要とされるのか。まず、学習者が興味や関心を示すことによって引き起こされる、いわゆる内発的動機づけが必要となる⁸。学習者の内面からの動機づけを主軸とした場合、言語教育は人間を中心とした教育になりうる⁹。内発的動機づけをマズロー（Maslow）が提唱した「動機づけの基本的欲求階層説（Basic Needs Theory of Human Motivation）」の立場から説明すると、欲求には欠損欲求と成長欲求に大きく分類される。

図1 マズローの基本的欲求の階層（縫部, 1975をもとに作成）



欠損欲求のうち、生理的欲求は食欲や睡眠などの生命維持に関連する欲求である。安全の欲求は苦痛や不快などの危険を回避することで、安定した感情を保とうとする欲求である。例えば、過去に英語授業で失敗したり、ほかの学生の前で恥をかいたりしたことがある学習者は、同じことを繰り返したくないと考えるので、必然的に発話が少なくなる¹⁰。所属と愛の欲求は、親や友

達などの他者から好かれないという欲求やグループにおける自分の居場所を作りたいという欲求などを含む。承認の欲求は自己を尊重したり、他者から理解されたり認められたいという欲求である。この4つの欠損欲求が満たされると成長欲求が生じてくる。

自己実現は、本来、潜在的に備えている能力を発揮し、ありのままの自分であろうという欲求である。言語教育においても他者の間違いを認め、お互いを認め合いながら活動する雰囲気を教室に作り上げないと、自己防衛学習になってしまい、英語でのコミュニケーションが成立しなくなる可能性がある¹¹。

そこで、この人間学的な教育理念の英語教育への応用が検討されている¹²。これからの英語授業では、個人の尊厳を尊び、他者との関係性を保ちながら、自己実現を果たすことが重要である¹³。とりわけ日本の場合、認知領域である言語の習得がこれまで第一と考えられていた実情をふまえると、今後は認知領域と情意領域の調和を図ることで学習者の人間理解の深化を目指すことが重要である¹⁴。グローバル社会において様々な課題を解決できる日本人を育成するためにも、英語能力の向上だけでなく、他者とのコミュニケーションが円滑にできるような資質を備えた人材の育成に力を尽くすべきだろう¹⁵。

3. 外国語としての韓国語教育¹⁶

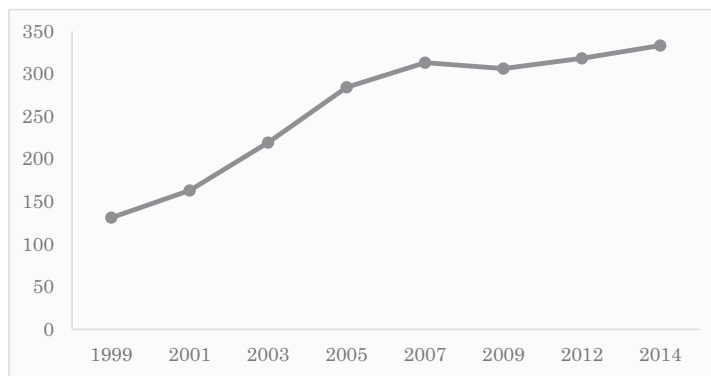
人間学を中心とした英語教育の必要性については上記で指摘してきたが、それでは、ほかの言語教育ではどうであろうか。近年、国内で学習者が増加しつつある韓国語の学習者の動向に注目し、その教育が日本の高等教育においてどのような経緯をたどってきたのか概観する。

国内の高等教育機関に韓国語学科が設置されたのは1925年であり、現在の天理大学（奈良県）であった¹⁷。1984年4月からNHKテレビ・ラジオでハングル講座が開始され、4年後の1988年にソウルオリンピックが開催されると国内の韓国語学習者が急増した。それにもない、国内の高等教育機関にも韓国語科目が設置され始め、大学では1980年代に30校、90年代に50校以上で韓国語が開講され、短期大学でも80年代に14校、90年代には20校近くが開講された¹⁸。さらに、2002年には日韓共催によるワールドカップが開催され、2002年に国内で『冬のソナタ』などの韓国ドラマが放映されると「韓流」などの造語が流行し始め、いわゆる韓流ブームが起こった。その後、第2次（2010年）、第3次韓流ブーム（2017年）と続き、韓国語学習者の増加に貢献するようになった。外国語学習の場合、学習言語そのものに対する関心が高いことは重要であるが、とくに

韓国語学習では韓国の音楽やアーティストなどを中心とする大衆文化への関心が強いことが特徴だといえる¹⁹。

文部科学省が実施した高等学校における英語以外の外国語科目に関する調査（2016）によると、高校生の韓国語学習者が増加しつつある（図2）。1999年には韓国語科目を開設していた学校が133校であったが、2007年には313校になった。2000年代後半から2010年代にかけて、韓国語学習者が急増していることが示された。埼玉女子短期大学でも、国際コミュニケーション学科韓国語コースが設置されて以来、入学者数は15名（2016年度）、30名（2017年度）、46名（2018年度）と増加しており、これは若者による韓国語学習の高まりを裏づけるものである。

図2 高等学校における韓国語・朝鮮語の開設学校数（文部科学省，2016より作成）



4. 国内外における韓国語教育研究

4.1 国内における韓国語教育研究

高等学校での韓国語開設校数や第一著者が勤務する短大の入学者数の推移から、韓国語を学ぶ若者が増加していることは事実だが、では、その教育効果を検証するための韓国語教育に関する研究数はどのように推移しているのだろうか。そこで、NII学術情報ナビゲータ（CiNii）を用いて、日本における韓国語教育研究のデータを検索した。キーワードに「日本人」「韓国語学習」と入れたところ、24件の論文しか検索されなかったのに対し、「韓国人」「日本語学習」と入力すると301件の論文が該当した（2018年9月16日現在）。なかでも、CiNiiの日本人韓国語学習に関する論文のうち、2014年以降に発表されたものは8件であった。

国内の韓国語教育研究は、在日韓国人・朝鮮人学習者を対象とした研究²⁰と、韓国語を外国語として学んでいる日本人学習者とに大きく分類される。日本語と韓国語の語彙や文法の共通性や

語彙習得に関する研究²¹も実施されている。なかでも発音変化の仕組みを理解するには時間がかかることから、日本人学習者による韓国語の発音規則の習得に関する研究が長年続けられている²²。また、どの言語であっても発音を向上させるためにはその言語を話す練習をするのは当然であるが、韓国語の場合、日本人学習者が授業以外で話す練習をする機会がほとんどないことも指摘されている²³。教育ICTの分野でも韓国語教師のための教材支援ツールが開発され、韓国語の単語や発音指導で活用されている²⁴。

これまで、日本語と韓国語の対照研究が中心的な役割を果たしていた。例えば、日本語の「安寧」と韓国語の「アンニョン」のように同じ意味で使用されても発音が異なる単語もあれば、日本語の「図書館」と韓国語の「トソグァン」のように意味と発音が同じである単語もある。このような言語学的な共通性も指摘されており²⁵、この観点からの言語教育も求められよう。事実、韓国人の日本語学習者のなかには、日本語（とりわけ漢字）を発音できないとしても、論文や書籍などを読める人も多い。今後は学習者の個性や動機づけ、ICTを活用した韓国語教育などの研究以外に、すでに英語教育で実践されているような学習者の自己の育成に結びつくような教育実践を研究することが課題となる。

4.2 米国における韓国語教育研究

国外における韓国語教育の研究では、米国の場合、韓国語を継承語として学んでいる学習者（heritage learners）とそうでない学習者（non-heritage learners）に関する研究²⁶が多く含まれている。他には学習者のアイデンティティーと言語能力の関係なども検証されている²⁷。その理由には、韓国以外で韓国人が多く居住している国を調査したところ、米国が1位、2位は中国、3位が日本という結果であった²⁸。一方で、米国では英語を学ぶことが重要だと考えている韓国人も少なくないため、韓国人学校ではなく現地の公立学校などに子供を通わせる親もいるという²⁹。

5. 人間性を重視した韓国語教育とは

これからの韓国語教育において、学習者の自己実現を達成するような授業を目指すにはどのようにすべきだろうか。そこで、このような教育理念のもとで韓国語教育を実践する場合の指導方法の一例として、学習者ビデオを活用したスピーチ指導の有用性を紹介したい。これは、筆者らによる英語授業におけるスピーチ指導の効果を検証した取り組みであるが、授業において学習者

のスピーチ発表を撮影し、その映像を視聴しながら自己評価やピア評価を実施するだけでなく、その映像をモデルとして第三者に示すことでさらなる効果が期待できると示唆しており³⁰、この教育内容は英語だけでなく、韓国語などの外国語においても応用の可能性が見いだせると考える。そこで、教育理念、指導目標、指導内容、指導方法、評価の観点³¹から、韓国語教育で学習者のビデオ映像を活用したスピーチ指導を実施する際の留意すべき点を以下に示す。

まず教育理念であるが、英語教育と同様に韓国語教育においても「異なる価値観を有する他者との交流を積極的に図り、心を開いて理解しあう態度、およびコミュニケーション能力の育成を図る³²」という理念を掲げる必要がある。しかし英語教育と異なるのは、韓国語教育は日韓の経済や政治的な関係によって学習者数の増減に影響を与える可能性がある。そこで、できるだけ韓国語学習を継続できるような環境や雰囲気を作り出し、日韓で起こりうる問題解決や文化交流に積極的に貢献できるような人材の育成が、韓国語教育における使命となる。

次に指導目標として、スピーチというコミュニケーションスタイルを通じた言語技能の習得があげられる。発表者は身近な話題について書いたり、話したりする能力を育成する。聞き手は、話し手が伝えようとしている内容を理解するための聞く能力や態度を育成する。もう一つは、学習者らが互いに努力しながらスピーチに取り組む姿勢を見せることで、他者に対する人間理解を深めようとする態度を育む。ピア評価を導入することで、他者からのフィードバックを得ることが可能となり、それを参考にするとさらなるパフォーマンスの向上につながる。とくに、面識のない学習者のスピーチ映像をモデルとして示すことで、内集団バイアス³³が排除され、モデルの長所や短所に対する気づきを促すような態度を育成する。

続いて指導内容であるが、自分自身の身近な話題をスピーチとして扱うことはもちろんのことであるが、韓国語を学んでいる日本人学習者の多くが韓国の大衆文化に関心を寄せている点を考慮すると、韓国社会の理解を深めるような内容も題材として設定することが可能である。

スピーチ指導において学習者のビデオ映像を効果的に活用するために、まず教師が指導者であるだけでなく、協同学習者およびファシリテーターでもあることに留意する必要がある³⁴。学習者がリラックスした環境でスピーチするためには、普段から外国語を話すことに対する不安を軽減するような教室風土を作っていくことが重要である。スピーチの途中で、発表者が話す内容を忘れてしまったとしても、その状況を教師もほかの学習者とともに受容できるような教室風土を構築していく。ビデオ映像を学習者に見せる際、教師が気づいたことを指摘してしまうと、学習者は異なる意見を出しにくいと思われる。学習者による気づきを促すには、まず学習者同士でビデオ映像からの気づきを共有させるような機会を教師が設けるようにしていく必要がある。そこ

で、授業における成長を確認するためには、学習者のスピーチを複数回にわたって撮影し、記録に残していくのが好ましいと考えられる。その映像を比べながら学習者の成長を見出すと、学習者の自己肯定感を高めることにつながるからである。

評価方法では自己評価・ピア評価および教師による評価があげられるだろう。自己評価では、ビデオ映像を見ながら視覚的および聴覚的の両面から振り返ると、その後のスピーチで改善すべき箇所を自分で確認することが可能となる。ピア評価を導入することで、評価者としての責任感を育成することができる。教師の評価は、学習活動の効果を検証する役割を担う。スピーチの機会を一度だけでなく複数回設けると、学習者が改善の余地があると考え、さらに向上させようという気持ちにつながる。スピーチの変化を経時的にたどることで自分の成長を内省的だけでなく視聴覚的に確認できるので、外国語学習に対する達成感を高める効果も期待できる。

上記のような言語教育における教育内容は、筆者らの英語教育研究ですでに実践されており、学習者のビデオ映像活用は言語学習の動機づけを高めるだけでなく、主体的で対話的な深い学びをとまなうアクティブラーニング型の授業実践をもたらすと提案している³⁵。

6. 今後の課題

人間学を中心とした韓国語教育についてさらなる検討を進めるために、以下の点について留意する必要があるだろう。1つ目は、韓国語という教科のなかで学習者が言語スキルの習得だけを目指すのではなく、マズローが提唱するように、学習者の内面の欲求を満たすことができるように指導することである。人間育成を目指した教育では、学習者が授業でお互いの失敗を認め合えるような学習環境を作り上げることが可能である（安全の欲求）。また、ペアやグループワークに参加することで、受け身ではなく能動的な学習を展開することにつながる（所属と愛の欲求）。さらには、学習者の積み重ねてきた努力がほかの学習者や教師に肯定的に評価される（承認の欲求）。それぞれの欠損欲求が満たされていくと、その結果として自己実現が達成されるのである。学習者の個を確立するために、韓国語授業では学習者のできる限りの能力を発揮できるような学習風土を作りあげていかなければならないだろう。

もう一つは、授業のなかで学習者が長期にわたって韓国語を学びたいという学習環境を作り上げることである。韓国語学習者の多くは韓国の芸能やファッションなどの大衆文化に関心があることは前に述べたが、国内における韓流ブームが過ぎ去ったとしても学習者の韓国語学習を継続

させるためには、高等教育での韓国語授業は教育的であると同時に楽しさも兼ね備えていることが望ましいだろう。もちろん、初級レベルの学習者などにはスピーキングやライティングでの間違いを恐れ、自己表現を避ける傾向も見受けられる。しかし、学習過程で起こりうる困難や挫折を自分は乗り越えられたという満足感や達成感を味わうことが可能になるのではないか。

3つ目は、英語教育と同様、韓国語教育でもコミュニケーション能力の育成を目指した指導を実践する必要性である。そこで、授業では学習者同士で韓国語を使ってのやりとりをしたり、スピーチを取り入れたりするのが効果的だと考えられる。なぜなら、自分の言いたいことを考え、それを繰り返してアウトプットすることが言語の記憶につながるからである³⁶。

最後に、韓国語でコミュニケーションができる人材の育成は、日本と韓国の社会的・文化的な距離を縮める効果をもたらすだろう。例えば、円卓シネマの取り組みがある³⁷。映画を共同で見ながら、歴史的事実を共有しつつ、お互いの歴史的認識の相違を認め合うことは相互理解の出発点となる。とくに、お互いの言語を学びあうことは重要であり、日本人学生にとって韓国人学生との交流は不可欠である。互恵的な学習環境を整備していくことにより、相互理解がさらに深まることが期待される。本稿では人間学的アプローチの観点から、日本の高等教育機関における韓国語教育の意義と概念構築について論じた。社会文化的アプローチや過去との比較を取り入れた歴史的アプローチによるさらなる進化が次の課題である。

謝辞

本論文の執筆にあたり、阿部恵子さんと木下恵美さんには下読みをしていただきました。この場を借りてお礼申し上げます。

注

1. 国内での英語教育の始まりは、明治維新による西洋からの文化の流入まで遡る。
2. ヨーロッパ言語共通参照枠 (Common European Framework of Reference for Languages) を参考にした。
3. 文部科学省による「小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説外国語活動・外国語編」を参照。
4. 加賀田「人間学的英語教育の概念構築への一考察」『大阪商業大学論集』5(1), 2009, p472.

5. Moskowitz, *Caring and Sharing in the Foreign Language Class*. Newbury House Publishers, 1978, p14.
6. 縫部『人間中心の英語教育』ニューベリハウス出版社, 1985, p5.
7. 縫部, 同書, p16.
8. 一方で、外発的動機づけは、褒美などを与えることによって引き起こされる動機づけのことである。
9. 縫部, 同書, p34.
10. 縫部, 同書, p35.
11. 縫部, 同書, p36.
12. 例えば、加賀田「人間学的英語教育の概念構築への一考察」『大阪商業大学論集』5(1), 2009, pp.467-479.
13. 加賀田, 同書, p468.
14. 加賀田, 同書, p472.
15. 加賀田, 同書, p473.
16. 桂(2005)によると、日本語での韓国語の標記方法には韓国語以外に朝鮮語、ハングル、コリア語、韓国・朝鮮語という呼び名が一般的に使用されているが、本稿では「韓国語」という表記に統一する。
17. 当時は天理外国語学校という呼称で朝鮮語部が設立された。詳しくは、<https://www.tenri-u.ac.jp/ins/kor/index.html>を参照。
18. 呉「日本における韓国語教育の現状と課題」『二松學舎大學論集』44, 2001, p17.
19. 文・金「日本の大学機関における「韓国語学習」－愛知学院大学の「韓国語」選択必修科目に関するアンケート結果とその分析(1)」『愛知学院大学教養部紀要』61(4), 2014, p78.
20. 例えば、金「韓国・朝鮮語教育の現状と学習者の意識に関する調査研究」『ことばの科学』17, 2004, pp.215-236.
21. 例えば、原「日本人韓国語学習者の語彙習得－漢字語に関する韓国語教科書と学習者の研究－」『東京女子大学言語文化研究』18, 2009, pp.20-38.
22. 例えば、鈴木「韓国・朝鮮語学習の初期段階における文字と発音の教授法に関する一考察：母音字とその発音を中心に」『外国語教育』39, 2013, pp.33-48
23. 崔「日本人韓国語学習者の話し言葉をいかに評価するか：「わかりやすさ」の評価項目抽出」『熊本県立大学文学部紀要』24(77), 2018, pp.47-61.
24. 神谷 [金]・高・神谷「韓国語教育におけるデータベース活用型スライド教材提示ツールと授業で

の実践利用」2017.

25. 田原・朴・伊藤 (1987). 「韓国語単文理解における主題助詞と主格助詞の動作主性とその発達：日本語の助詞ハとガとの比較」『教育心理学研究』35, pp.213-222.
26. 例えば, Choi, A Heritage Language Learner's Literacy Practices in a Korean Language Course in a U.S. University: From a Multiliteracies Perspective. *Journal of Language and Literacy Education*, 11 (2), 2015, pp.116-133; Leeman, Heritage Language Education and Identity in the United States, *Annual Review of Applied Linguistics*, 35, 2015, pp.100-119.
27. 例えば, Park, Identity and agency among heritage language learners, 2011, pp.171-207.
28. 金「世界の中の韓国語」『関西大学視聴覚教育』29, 2006, p85.
29. 金, 同書, p88.
30. Okada, Sawaumi & Ito (2014, 2017, 2018a, 2018b) を参照。
31. 加賀田 (前掲書, p473) は、教育理念、指導目標、指導内容、指導方法、評価の5観点から人間学的英語教育について再構築しているが、本稿でも同様の観点から人間学的な韓国語教育について示した。
32. 加賀田, 前掲書, p473.
33. 自分の所属する集団を好意的に評価すること。
34. 加賀田, 前掲書, p475.
35. アクティブラーニング型の授業とは「書いたり, 話したり, 発表することを通して, 学習者の知覚・記憶・言語・思考などの心的表象としての情報処理プロセスを他の学習者と共有することによる学び」を示す (岡田・澤海・いとう, 2018)。
36. 白井『英語教師のための第二言語習得論入門』大修館書店, 2012, p40-42.
37. 伊藤・山本『日韓傷ついた関係の修復：円卓シネマが紡ぎだす新しい対話の世界2』北大路書房, 2011.

英語文献

- Choi, J. A heritage language learner's literacy practices in a korean language course in a U.S. university: From a multiliteracies perspective. *Journal of Language and Literacy Education*, 11 (2), 2015, 116-133. http://jolle.coe.uga.edu/wp-content/uploads/2015/10/Article-6_Choi-FINAL.pdf (閲覧日2018年11月23日)

- Jee, M. J. Language learners' strategy use and self-efficacy: Korean heritage learners versus non-heritage learners. *Language Research*, 51(1), 2015, 167-195.
- Lantolf, J. *Sociocultural Theory and Second Language Learning*. Oxford University Press, 2000.
- Leeman, J. Heritage language education and identity in the United States, *Annual Review of Applied Linguistics*, 35, 2015, 100-119. doi: 10.1017/S0267190514000245
- Moskowitz, G. *Caring and Sharing in the Foreign Language Class*. Newbury House Publishers, 1978.
- Okada, Y., Sawaumi, T., & Ito, T. Different effects of sample performance observation between high and low level English learners. In M. K. Aishah, S. K. Bhatt, W. M. Chan, S. W. Chi, K. W. Chin, S. Klayklung, M. Nagami, J. W. Sew, T. Suthiwan, & I. Walker (Eds.), *Knowledge, skills and competencies in foreign language education* (pp. 394-413). Singapore: NUS Centre for Language Studies, 2014. <https://www.fas.nus.edu.sg/cls/CLaSIC/clasic2014/proceeding.htm> (閲覧日2018年11月23日)
- Okada, Y., Sawaumi, T., & Ito, T. Effects of observing model video presentations on Japanese EFL Learners' oral performance. *Electronic Journal of Foreign Language Teaching*, 14 (2), 2017, 129-144. <http://e-flt.nus.edu.sg/v14n22017/okada.pdf> (閲覧日2018年11月23日)
- Okada, Y., Sawaumi, T., & Ito, T. How do speech model proficiency and viewing order affect Japanese EFL learners' speaking performances? *CALL-EJ*, 19(2), 2018a. 61-81. <http://caliej.org/journal/19-2/Okada-Sawaumi-Ito2018.pdf> (閲覧日2018年11月23日)
- Okada, Y., Sawaumi, T., & Ito, T. A replication of Okada, Sawaumi, and Ito (2017): Effects of viewing speaker videos by proficiency order on Japanese EFL learners' speaking skills. *Electronic Journal of Foreign Language Teaching*, 15(2), 2018b. 388-404 (閲覧日2018年1月22日)
- Park, M. Identity and agency among heritage language learners. In K. A. Davis(ed.), *Critical qualitative research in second language studies: Agency and advocacy* (pp.171-207). Charlotte, NC: Information Age, 2011.
- Vygotsky, L. *Mind in Society: The Development of Higher Psychological Processes*. Harvard University Press, 1978.
- Wang, Hye-Sook. A review of research as Korean as a foreign language. *The Korean Language in America*, 8, 2003, 7-35.
- 日本語文献
- 崔文姫「日本人韓国語学習者の話し言葉をいかに評価するか：「わかりやすさ」の評価項目抽出」『熊本県立大学文学部紀要』24(77), 2018, 47-61.
- 原瑞穂「日本人韓国語学習者の語彙習得－漢字語に関する韓国語教科書と学習者の研究－」『東京女子大学言語文化研究』18, 2009, 20-38.

- 伊藤哲司・山本登志哉『日韓傷ついた関係の修復：円卓シネマが紡ぎだす新しい対話の世界2』北大路書房, 2011.
- 加賀田哲也「人間学的英語教育の概念構築への一考察」『大阪商業大学論集』5(1), 2009, 467-479.
- 神谷[金] 善美・高秀美・神谷健一「韓国語教育におけるデータベース活用型スライド教材提示ツールと授業での実践利用」2017. <http://www.oit.ac.jp/ip/~kamiya/kor/index.html> (閲覧日2018年11月23日)
- 姜奉植「日本人韓国語学習者の為の韓国語発音変化の諸規則」『Liberal arts = リベラル・アーツ』10, 2016, 35-54.
- 金由那「韓国・朝鮮語教育の現状と学習者の意識に関する調査研究」『ことばの科学』17, 2004, 215-236.
- 金相敏「世界の中の韓国語」『関西大学視聴覚教育』29, 2006, 85-94.
- 権英秀「言語の普遍性と個別性」『新潟大学大学院現代社会文化研究科「言語の普遍性と個別性」プロジェクト』2011, 91-102.
- 桂正淑「日本における韓国語学習・教育の問題点：韓国語テキストの比較」『文化情報学：駿河台大学文化情報学部紀要』12(2), 2005, 33-45.
- 文部科学省「小学校学習指導要領（平成29年告知）解説外国語活動・外国語編」2017. http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afiedfile/2018/05/07/1387017_1_1_1.pdf (閲覧日2018年11月23日)
- 文部科学省「英語以外の外国語の科目を開設している学校の状況について（平成26年5月1日現在）」2016. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/058/siryu/_icsFiles/afiedfile/2016/05/25/1371098_1.pdf (閲覧日2018年11月23日)
- 文嬉眞・金美淑「日本の大学機関における「韓国語学習」 - 愛知学院大学の「韓国語」選択必修科目に関するアンケート結果とその分析（1）」『愛知学院大学教養部紀要』61(4), 2014, 69-84.
- 縫部義憲『人間中心の英語教育』ニューベリハウス出版社, 1985.
- 呉英元「日本における韓国語教育の現状と課題」『二松學舎大學論集』44, 2001, A1-A17.
- 岡田靖子・澤海崇文・いとうたけひこ「英語授業におけるビデオ映像を活用したアクティブラーニング」『外国語教育メディア学会関東支部研究紀要』2, 2018, 23-37.
- 朴珍希「外国語としての韓国語教育の現状と課題：岡山県内の大学・高校の「第2次韓流ブーム」以降の変化を中心に」『岡山県立大学教育研究紀要』2(1), 2017, 13-23.
- 白井恭弘『英語教師のための第二言語習得論入門』大修館書店, 2012.
- 鈴木陽二「韓国・朝鮮語学習の初期段階における文字と発音の教授法に関する一考察：母音字とその発音を中心に」『外国語教育』39, 2013, 33-48.
- 田原俊司・朴媛叔・伊藤武彦「韓国語単文理解における主題助詞と主格助詞の動作主性とその発達：

日本語の助詞ハとガとの比較」『教育心理学研究』35, 1987, 213-222.

山田悦子「高等教育における言語教育の目的を考察する」『神田外語大学紀要』23, 2011, 209-226.

東條弘子「外国語教育研究における社会文化理論の布置」『関東甲信越英語教育学会誌』28(0), 2014, 69-82.